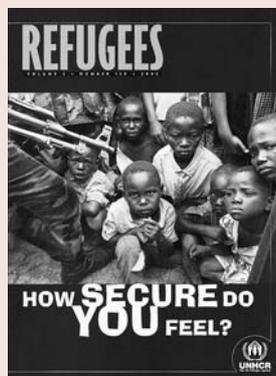


# スーダン南部

## 「爆弾があるなんて 銃が何かなんて 考えもしなかった」

キティ・マッキンジー著



「Refugees」誌 通巻139号より

パトリック・ゴンダ(17歳)は水泳とサッカーが好きで、よく笑う楽天的な少年だった。ウガンダでスーダン難民の一家に生まれ、屈託なく育った彼は、今でもスーダン南部を荒廃させている爆弾、地雷、小火器といった武器のことをよく知らなかった。

2005年1月に21年に及んだスーダン内戦に正式に終止符が打たれる前でさえ、パトリックは「祖国に帰れたことを喜んでいました。キャンプにいるよりましだから」と、父親のベン・ドコは、スーダン南部のカジョ・ケジに近い小さな町の中央に構えた広大な屋敷の木陰で語った。

だが4月9日、平和になった故郷でのパトリックの人生は、むごたらしい結末を迎えた。その日、彼は友達と、自宅からさほど遠くない場所でキラキラと光る物を見つけた。それは120ミリ対空砲の砲弾だった。家に持ち帰る途中、その見慣れない物体は彼らの手からすべり落ち、何マイルも先までとどくような轟音あげて爆発した。爆発でできた穴から少し離れたところにある大ぶりの木々さえも吹き飛ばした。

最近、スーダン南部では指輪やプレスレットを作るために不発弾を解体したり、鉄くずとして地元の鍛冶屋に売る若者たちがあらわれた。ベン・ドコは、息子が砲弾で何をするつもりだったのか知らない。単に好奇心で拾っただけかもしれない。

「こういう物に触れてはいけないと、母親は子どもたちに言い聞かせていたのですが」とドコは言う。パトリックの通夜で、高くついた長男の無知さを嘆きながら、彼は必死に涙をこらえていた。「子どもたちは小さい頃から外国にいましたから、この国の状況をまったく知りませんでした。爆弾があることも、銃が何かということも知らなかったのです」

不発弾、どこに埋められているかわからない地雷、そして

小火器など、スーダンのここ40年のうち27年間を苦しめてきた戦争の遺産は、今年1月に和平合意が結ばれた後も、難民約55万人と国内避難民400万人の帰還を妨げている最大の障害となっている。

しかしその危険にも拘わらず、すでに数十万人が国連の支援を待たずして故郷に向かった。地元当局によれば、2003年以降に帰還した人は西赤道州だけで16万人。カジョ・ケジでは、UNHCRは、毎月4000人近くの帰還者を登録している。

### 帰還への危険な道のり

「近隣諸国にいる50万人以上のスーダン難民が帰還に関心を示していますが、帰路に地雷がないことを確認できないかぎり、UNHCRはトラック隊を組んで帰還を始めるわけにはいきません」と、ジャン・マリー・ファクリUNHCRチャド・スーダン事業統括部長は言う。

UNHCRは、雨期の終わりとともに自発的帰還を支援する準備を整えている。現在UNHCRと協力団体は地元社会と帰還民のため、インフラ整備に重点を置いている。「11月、12



スーダン南部に無数に埋められている地雷を探す努力

月以前に、来年の1月でさえも、大規模な難民の帰還があるとは思いません」と、主な帰還先のひとつである西赤道州、イエイにあるUNHCR事務所のアフマド・ワルサメ所長は言う。

とはいえ、2001年のタリバン政権崩壊に伴い、アフガン難民が帰郷を始めた頃、パキスタン北部の国境の町ペシャワール事務所に勤務していたワルサメは、スーダン南部出身の難民が戻ってきて、国連を驚かせることになるかもしれないと言う。「われわれは、毎月1000人のアフガン難民がペシャワールを通過して母国に戻る支援をしていたが、ある日、突然、その数が1日1万人になった」と彼は振り返る。

だがスーダン難民は、まだ警戒心が強いようだ。ウガンダに来て11年になるビクトリア・スティマ（32歳）は、ウガンダ北部のイェルル定住地で農業を営んでいる。息子2人と娘2人を連れて故郷に帰りたという気持ちは十分あるが、今はまだ危険すぎると考えている。「もうスーダンは大丈夫だと聞きましたが、まだ地雷があるでしょう」と、わらぶき屋根でレンガづくりの家の外でビクトリアは言った。「薪を拾い行ったら地雷を踏んで死んでしまうかもしれない。そんな場所に飛び込むのは無理です。どこに地雷があるのか知らないし」

夫で英国教会の牧師ゴードン・エルナイは、2月に2週間ほど故郷の様子を見に行った。そして地雷があるばかりか、スーダン南部で出会ったほとんど全員が銃を持っていたと怯えて帰ってきた。「市民の武装解除に本気で取り組む必要があります」とゴードンは完璧な英語で言った。「市民があれだけ多くの銃を持っているかぎり、帰還は考えられません」。今は平和の定着に覆われているが、民族間の反目が大きくなった時、恐ろしい事態に発展する可能性がある」とゴードンは言った。

スーダン難民と国内避難民にとって心配なのは、そこらじゅうにある地雷や不発弾、小火器だけではない。思い切って帰還にふみ切る前に、生活再建に必要な基本的インフラの整備を期待している。

### 復興にいちばん必要なこと

UNHCRは、帰還民だけでなく地元社会全体の活性化のために学校と診療所を建て直し、井戸を掘り、職業訓練を行っている。UNHCRカジョ・ケジ事務所のエリシャ・ヌジコ所長は言う。「難民として国外にいる親族の帰還を受け入れられるよう地元社会を支援し、保健施設や水などの資源への圧迫を最小限にして、帰還民と地元住民がうまく共生でき



再建が始まったが、故郷に戻る日を待つ何十万人もの人々の生活は依然として厳しい

UNHCR/MCKINSEY/SDM・2005

る環境作りをめざしている」女性、とりわけウガンダとケニアに逃れた難民女性たちには、教育を受け難民キャンプの社会においてリーダーシップを発揮する機会があった。いずれもスーダンの伝統文化では得られないものだ。「男たちはスーダンに戻ったら『アフリカの文化』を実施すると言っています」と、ドメニカ・イドワ（26歳）は言う。教師のドメニカは、ウガンダ北部の難民学校で女生徒

たちの相談役だった。「でもそれは時代の移り変りとともになくなったのです」

「私たちはウガンダに自分たちの人権を置いていくつもりはありません」と彼女は毅然と語る。「強く生きていくつもりです。落ち込むつもりはないし、スーダン南部に残っていた女性たちもいつか表舞台に出られるように後押しするつもりです」

だが女性の権利や教育の機会も、地雷という難題の前ではかすんでしまう。「保健医療や水、教育の確保はスーダン南部で実現されそうですが、最も重要なのは地雷をなくすることです」とドメニカは言う。「地雷があっては、恐しくて（家を建てるために）木を切りに行ったり、土地を耕すことが怖くてできません。地雷除去は本当に最優先課題なのです」

地雷はきわめて広範囲に敷設されていて、国連職員は西赤道州の2つの主要都市であるイエイとカジョ・ケジを歩き来するにも、大変な遠回りとなるが、わざわざウガンダ北部を経由する。2つの地点を結ぶ50キロほどの幹線道路は、地雷の危険があるからだ。UNHCRの協力機関である「世界食糧計画（WFP）」は、「スイス地雷除去財団（FSD）」にこの主要道路の地雷除去を依頼している。



UNHCR/MCKINSEY/JGA・2005



イザーク・ラサスは10年前に地雷の扱いを学んで以来、25個の地雷を敷設し、70個以上を除去した。彼は南部の反政府勢力、「スーダン人民解放軍 (SPLA)」の元兵士で、その後SPLAの地雷撤去担当者になり、SPLAの侵行を妨げるために、スーダン政府が敷設した地雷を除去した。現在はFSDと協力して幹線道路の地雷撤去にあたり、西赤道州に難民帰還の道を開いている。

### スーダンを安全な国にするために

「自分の祖国を安全にできて嬉しいよ」と、イザークは仕事の休憩中に言った。周囲には、ロケット弾発射砲やさびた戦車の残骸が散乱する風景が広がっている。

FSDは、特別な訓練を受けて、国連に地雷除去者として認定された地元スーダン人を雇って幹線道路脇の幅12メートルのエリアで地雷除去を行っている。この先トラックの行き来が激しくなっても耐えられるよう道路の改修工事をする際に、今後持ち込まれる建設機器を置くスペースを確保するためだ。

作業のスピードは遅い。うまくいった日でも400メートル、たいていの日は250メートルしか進まない。

UNHCRは各村に伸びる枝道の地雷除去に対する財政支援を行っている。また別のチームは、耕作地の除去作業にあたる予定だ。

「難民が帰ってくるまでは事故はまったくなかった。地元住民は、どこを避けるべきか知っていたから」と、カジョ・ケジ村の帰還民担当であるヘンリー・アミュル・スリマンは言う。帰還民に危険を周知させるためにもっと努力していかなくてはいけない。

息子パトリックを失ったベン・ドコは、それを身にしみて感じている。地面に敷かれたマットに静かに座っている女性たちに囲まれ、まだ有望な将来があった17歳の息子を失ったことを嘆きながら、ベンは自分と同じ苦しみを他の家族が味わうことのないよう、もっとさまざまな活動をしてほしいと語った。「みな学校に行き、爆弾とはどういうものか、学ぶべきです」と彼は熱心に言う。「学校が新たに帰還した人たちに教えてやらなければ。彼らは爆弾の存在を知る手立てがないのだから」

だが、このような努力もモーゼス・タバ(25歳)には遅すぎた。彼はサイズの合わない義足をひきずってカジョ・ケジを歩かなくてはならない。地雷で脚を失ったのは、2002年に帰還して間もなくのことだった。家のないモーゼスは、友達が働く病院に寝泊りし、使い古しの缶で石油ランプを作って僅かな生計をたてている。「帰ってこなければよかった」と、辛そうに語った。「国境の向こうにとどまっていれば、脚を失ったりしなかったのに」